

授業改善をめざして — 教養外国語教育研究 部会報告

人文学部 荻部恒徳

本ワークショップの場で、関係者以外にはあまり知られていなかった「教養外国語教育研究部会」を紹介し、これまでの活動報告をする機会を与えられましたことに感謝申し上げます。

まず、組織の概要についてお話し致します。本研究部会は平成7年9月1日に発足致しました。当時、外国語系列ワーキング・グループ会議において、授業改善をめざす全外国語担当教員による研究会を設けてはどうかとの議論が起こり、実現に向けて規約作りが行われ、「教養外国語教育研究部会」の名称で設置されたものです。その規約（「大学教育研究年報」第2号（1996年）、290-91頁掲載）によりますと、「大学教育開発研究センターのもとに位置づけられる組織とし、教養教育として開設されている各外国語科目の、特に授業における教育改善に資する諸活動を行うことを目的とし、研究発表会、講演会、報告会などを年に数回開き、専任教員・非常勤講師の別なく全ての教養外国語担当者を会員対象者とする」ことになっています。外国語系列ワーキング・グループが、大学教育開発研究センターの教養教育実施部門の機関であるのに対し、「教養外国語教育研究部会」は、同センターの研究開発部門に属すべき性格のものであります。大学教育の改善にはこうした二つの機関が車の両輪となって活動

してこそ、その実が上がるものと考えられます。

次にこれまでの活動状況を報告致します。第1回の研究発表会が平成7年11月15日（水）に開かれ、発表者は人文学部ロシア語教員のアレクサンドル・プラーソル氏で、演題は「外国語教育の目的と実践—ロシアと日本での経験から」でした（同年報、291頁参照）。日本と教育システムの違うロシアの極東大学等で行われている外国語教育は専門教育が中心で、各外国語の専門職、例えば教員・研究者・外交官・通訳・翻訳者等をめざす人の養成機関的性格を持ち、5年間一貫して集中的・実践的な教育が行われ、日本の大学に見られる教養教育的な面が少ないなど、非常に興味深い紹介が行われました。研究発表会終了後、ワインパーティに移り、そこでもさらに発表者を囲んで、ソ連崩壊後のロシアの状況について話し合うなど、こういう研究会が、我々の知識と認識を深めてくれる有意義な意見交換の場であることも確認されました。

第2回目は視察報告会として平成7年12月12日（火）に行われました。この年の11月15、16の両日人文学部英語教員の福田一雄・佐々木充の両氏が英語教育の先進大学として有名な慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスと亜細亜大学の英語授業を視察してきた報告でした（同年報、50-54頁参照）。慶應義塾大学では自己表現とコミュニケーションの育成という理念のもとに英語教育が位置づけられており、授業も学生が中心となって興味のあるテーマをリサーチして纏めたものを発表し、教員はアドバイザーの役割に徹しているという。従って授業も自己紹介・他人紹介、プレゼンテーションとディスカッション、ディベートの3段階から構成されているのが特徴的であるという。両氏がビデオ撮影してきたプレゼンテーションの授業風景は我々の想像を越えて斬新なものでした。学生がOHPを使って、その界限のラーメン屋を紹介するという極めて卑近なテーマを扱った授業では、学生の英語の誤りを教員が一々直さないという両氏のコメントと共に学生の自主性を尊重する教育に我々は新鮮な驚きを感じました。

一方、亜細亜大学はアメリカ留学プログラムを英語教育の最大の特徴にしている大学です。2年生を5ヵ月間アメリカの提携先の州立大学に送り、アメリカ人学生と同室で生活させ、17単位を卒業要件単位に振り

替える制度だという。この留学に合わせて一年生にはフレッシュマン・イングリッシュのプログラムがあり、月曜から金曜まで毎日ネイティブ教員を中心とした、大学が作成したコミュニケーションの同一教科書を使用した授業が組まれているという。両氏が見学しビデオ撮影してきた授業では、アメリカの家族生活のビデオを見たあと、学生がグループに分かれ、それぞれを一家族と見立てて紹介しあうもので、とっさに適当な表現を見つける必要のある学生にとってもスリリングな楽しい授業に見えました。

(第3回、第4回、第5回研究発表会についても本ワークショップで報告しましたが、内容等については、各発表会の司会者によって書かれた後述の「大学教育開発研究センター教養外国語教育研究部会報告」をご覧ください。)

さて、最後に本研究部会の問題点と今後の展望について私見を述べたいと思いますが、その前にこれまで発表くださった方々、司会の労を取ってくださった方々、会に出席して活発な質疑応答に参加してくださった方々に心から御礼申し上げます。問題点と言えるものは、会員が百人を越えているにもかかわらず、会によっては必ずしも出席者が多くないことですが、これには日時の設定が会員の都合に合わないことも考えられますので、運営委員の方の判断が大事なようです。次の問題はこの運営体制のことで、現在発足から一年半福田・中沢の両氏と荻部が委員でやっていますが、最初のことであり体制が整うまでボランティア的に引き受けたものです。後任を公的に選ぶことが今後のこの研究会の一層の発展のために必要なようです。

次に、今後の展望ですが、差し当たって次回の第6回も第5回同様「私の外国語授業」というテーマで教員のユニークな授業の試みを発表していただく予定です。6、7月頃に発表会を開き5月に募集をすることを予定しています。希望者が多い時は2回になることも考えられます。将来はJACETなどの各言語の教育学会や他大学との交流、部門別の専門研究グループの組織、例えば教材作成(教科書・ビデオ等)なども視野に入れた諸活動とそれらを可能にする予算獲得の研究も必要になるように思われます。

大学教育開発研究センター 教養外国語教育研究部会報告

第3回研究発表会

日時：1996年5月31日(金)

発表者：Gregory Hadley(非常勤講師)

演題：New Ways to Answer Old Questions:
An Introduction to Repertory Grids

司会者：福田一雄(人文学部)

[発表要旨]

ハドリー氏の発表はPersonal Construct Repertory Gridsと呼ばれる研究方法の紹介であった。この方法を最初に提案したのは教育心理学者の故ジョージ・ケリーであった。この方法は今もなお、心理学分野のみならず、教育、経営管理、人工知能などの分野で応用されているとのことである。

氏がこの研究を始めた動機は、どうすれば英語授業において学生と教師との十分なコミュニケーションが可能か、という問いであった。一つの方法として、学生が意識的、あるいは無意識的に抱えている物の見方、考え方を理解することだと氏は考えた。Repertory Gridsはそのための有力な調査方法であると主張される。氏が授業中に実施した調査は、次のようなものである。まず、「良い先生とは、どんな先生か」という問いを設定する。学生にランダムに様々なイメージを列挙させ、その中から上位8個の項目を選ぶ。たとえばもっとも頻度の高かった項目は、「優しい」(kind)であった。この選ばれた8個の項目を要素(element)と呼ぶ。これらは学生の表層意識内で選択されたイメージである。次にこの8個内からランダムに3個の項目を選ばせ、より共通したイメージを持つ二つを取りだし、その共通項的イメージを考えさせる。(この共通項的プラス・イメージは、Emergent Constructと呼ばれる)一方で、その共通項的イメージと正反対のイメージを考えさせる。(この正反対のマイナス・イメージは、Implicit Constructと呼ばれる)つまり、二つの2項対立的なイメージ群が、Repertory Gridsの空欄を埋め、全体的なPersonal Constructを作り上げるのである。これは、人間の観念構成は2項対立的であるというケリーの仮説に基づくものである。結果と

して、頻度の高いConstructから低いものまでを含めた、学生集団の認知的分布図を作り上げることができる。

Constructの項目別に言えば、マイナス・イメージの「先生」では、「退屈」、「冷たい」、「利己的」、「陰気」、「怠惰」、「不熱心」などの頻度が高く、プラスのConstructをしのいでいる。プラスのConstructで頻度が高かったのは、「快活」、「親切」、「熱心」、「暖かい」などであった。マイナス・イメージの方が固定的で引き出しやすく、プラス・イメージの方が、流動的で多様であるということなのであろうか。

ハドリー氏の研究は、日本という異文化内で英語を教えるという自らの状況と結びついている。氏は上述の調査結果を解釈する一つの有力な視点として、日本における「先輩・後輩システム」に注目している。つまり、日本人学生にとって、「先生」と「先輩」のイメージが重なっていると見る。この視点は、日本文化における儒教の受容形態についての氏の関心へと展開している。異文化間におけるPersonal Constructの異同についての氏の研究は、異文化間コミュニケーション研究としての意義に加えて、英語教育の基礎部門的研究としても興味深い。(本発表会には27名の出席があり、活発な質疑応答が行われた。)

第4回研究発表会

日時：1996年7月5日(金)

発表者：ベアテ・フォン デァ オステン (人文学部・外国人教師)

演題：ドイツ語は何のために教えられているのか
ードイツ人からみた日本のドイツ語教育ー

司会者：佐藤信行 (人文学部)

〔発表要旨〕

学問、技術的な知識を学ぶために必要であったドイツ語の役割はすでに終わった。従ってこれまでのドイツ語教育の内容と方法は根本的に見直されなければならない。制度的なことは別にして(今の制度下で文部省の言う「外国語を実用的に使う」「異文化理解」の目標は到底実現不可能である)、今実現可能な改革について提案したい。ひとつに、外国語は必修科目から外し、その選択と学習を完全に自由にすべきである。ヨーロッパ的な見方からすれば、学生は大人であって、

自分のすることに責任をもつのが当然である。日本の大学生はまだ指導の対象でしかなく、「子供っぽい」印象を受ける。大学で学ぶことは後の社会での仕事に結びつくものであるが、日本ではそうになっていない。ふたつには、授業回数を出来る限り増やし(「週4回のコース」は第一歩にすぎない)、クラス人数を15名、20~30名に減らすこと。特に初心者の場合少人数でなくてはならない。さらに最も重要なことは、学生が学ぶ理由・目的をはっきりさせることである。そのために教官は「授業は学生のためのもの」と考え(権威主義的に、一方的に教えるのではなく)、好奇心と様々な興味をもつ学生との交流、意見交換をする必要がある。外国語学習とは「新しい世界へ入る」ことであり、勇気のいることであるので、教官は学生を励まし、自信をつけさせることが大事である(日本の場合受験英語の影響で外国語を「話すこと」への恐れがある)。教官は学生の関心事に興味をもち、学生と積極的に話し、彼らの「期待、希望、不安の全部を聞き」、授業のコンセプトに取り入れなければならない。教官は学生に対し学ぶ理由を説明するという重い責任を負い、また学生は授業に参加し理由を理解し、大人として認められることで、より積極的に学ぶことが出来る。私たちは将来の社会を担う学生に外国語に関わる基礎、意欲、好奇心を与え、「新しい世界を見せる」努力をしなければならない。(出席者は約30名。発表のあと熱心な質疑応答が行われた。)

第5回研究発表会

日時：1996年12月13日(金)

テーマ：「私の外国語の授業」による研究発表

(3件の発表が行われた。36名の出席があり、各発表に活発な質疑応答が行われた。)

1 発表者：吉田和比古(法学部)

演題：ドイツ語教科教育法ー「格」の理解と習得をめぐるー

司会者：薊部恒徳(人文学部)

〔発表要旨〕

ドイツ語の初習者は「名詞の格変化」にとまどいを感じずるものだが、「冠詞」も含む変化表を暗記させるのではなく、「格」の概念と形態と機能を日本語や英

語などの他言語と類型論的に比較して理解させる方法を試みた。「誰ガ 何ヲ ドウスル」という短文を言語のタイプによって見ると、格関係は英語ではSVOという語順にたよるが、その語順に格が潜んでいるといえる。日本語では後置詞的な「格助詞」によって明示される。ドイツ語では名詞の前に置かれる冠詞によって格が明示される。また英語やドイツ語は日本語のさまざまな助詞に対し、前置詞をさらにつける場合もあることを説明する。理解をたすけるために、日本語／ドイツ語／英語における「格のシステム」の比較対照表をかかげ、具体例に「父が…、the father…、der Vater…」をそえて徹底を図った。

本発表は3カ国語を比較して「格概念」とその表し方のちがいを学生に知的に理解させることに成功した試みの一つであろう。

2 発表者：Paul Sevigny（教育学部・外国人教師）
演 題：My Language Class: Portfolio Evaluation

司会者：福田一雄（人文学部）

〔発表要旨〕

ポール・セヴィニ氏の発表は、「私の語学授業、ポート・フォリオ評価」というタイトルであった。ポート・フォリオの辞書的な意味は、「紙ばさみ、書類かばん」であるが、セヴィニ氏は、各学生に自分自身のポート・フォリオを持たせ、その中に、一年間の授業で課したすべての宿題やプロジェクトの成果を保存させた。

氏の授業（英語I b）の目的は、多角的、多面的なアプローチにより、英語の4技能（聞く、話す、読む、書く）を相互連関的に伸ばそうというものである。例えば、氏の最終的學生評価は、次のような割合で行われる。授業への積極的参加度（20%）、グループでの読書プロジェクト（15%）、ポート・フォリオー英語を書くすべての作業、語彙ジャーナル、読書・リスニング日誌などを含むポート・フォリオ（30%）、6種類のレポート（15%）、年2回の試験（20%）である。

この割合を見ても、ポート・フォリオ評価の比重の大きさが分かる。ポート・フォリオは教室外でのすべての英語学習を記録するものであるから、4技能すべての分野での活動が含まれる。不明な単語のリストを

作り、それが使われている文や文脈を記録したり、英語の歌を記録したり、夏休み中に読んだ英語の本について書いたり、いろいろな課題テーマについてエッセーを書いたりする。その内容は教室でのグループ活動（3人で1グループ）の中で発表されたり、書き加えられたりする。

ポート・フォリオを考え出した氏の動機は、まず学生が何を考えているのかを知りたいということ、そして年2回の教科書に沿ったテストに加えて、英語学習と学習評価のスタイルをもっと多角的なものにすること、そして学年末には、自分で作ったポート・フォリオを振り返りながら、学生自ら自分の英語がどのように進歩したかを自覚できるようにすることであったとされる。

氏の英語I bは教育と経済の一年生のクラスであり例えばポート・フォリオ用の作文として、教育学部生には、「教師をメタファーで表現せよ」という課題が与えられた。ある学生は、教師は「空」だと表現し、ある者は「潤いの雨」だと言い、また「アルプスの道標」だと表現する学生もいた。経済の学生には、「将来の理想的な職業」という課題が与えられた。氏は、学生の学習スタイルに大きく分けて2種類あることに気づいた。つまり、教科書に即した年2回のテストに向けて勉強する方を好むタイプ、他方、ポート・フォリオで自分の意見を書いたり、好きな本の感想を書いたりする学習法をより好むタイプである（もちろん両者を好むタイプもいる）。ポート・フォリオを支持する学生の声は様々であるが、「日常の学習の成果だから」、「自分自身の意見を書けるから」、「なによりも、ポート・フォリオは楽しい」といった声は傾聴に値する。

3 発表者：Charles Ahrens（非常勤講師）

演 題：My English Class -Using Video in the Classroom

司会者：福田一雄（人文学部）

〔発表要旨〕

チャールズ・アーレンズ氏は、教室でのビデオの使用について、実際に氏が使っているビデオ教材を見せながら発表した。

氏が使用するビデオの内容面の特徴は、まず何よりも、日本あるいは日本人がテーマになっている点である。そのため日本人学生にとってもっとも身近に感じられる内容になっている。たとえば、「日本—東京と田舎」と題するビデオでは、主人公は青森出身で東京の大学に通っている。東京の活気と騒々しさ、青森のお盆にみる日本の伝統、また地元での就職の難しさなどが描かれる。他のビデオでは、米大リーグで活躍する野茂投手が日本へ帰省した時の様子が描かれる。英語学習用に日本人や日本文化に関するビデオを使うことの最大のメリットは、日本人学習者がすでに持っている前提的知識によって英語の理解がより容易になるという点である。そのことは、CNNやBBCのニュースで外国の特殊な事件を見た場合の理解度と比べてみればよくわかる。アーレンズ氏は、ビデオのスク립トをすべて自分で書き出し、リスニング訓練用に多くの空欄を作る。ビデオ中の説明を要する単語をリストアップし、英語でパラフレースして学生に与える。さ

らに、ビデオの内容に関する、理解チェックの英文を用意する。短い英文に一つずつ空欄を作り、そこに入れるべき単語をまとめて示す。学生はビデオを何度か見ながら、内容に合致する単語を選び、英文を完成するのである。この内容チェックの文の空欄は、名詞、動詞、形容詞、副詞など、品詞別にいくつかのグループに分けられている。氏の今回の発表には含まれていなかったが、この品詞別のリスニング訓練は、たとえば接続詞、前置詞、代名詞など普通非常に弱く発音される品詞のリスニングにも応用可能であり、またリダクション化した音を聞き取る訓練にも発展させることができるだろう。

ビデオによる英語授業は、ただ単にビデオを漫然と流しているだけでは、効果はきわめて低い。全体的内容把握や細部の聞き取りをチェックし、学生の理解を促進するような（できれば手づくりの）ワーク・シートを用意する必要がある。アーレンズ氏の今回の発表は、そのことの重要性を示唆している。